

## 日本人の親は「褒める」「叱る」のが下手くそ！

保育士として12年間、保育に携わってきた大阪教育大学准教授の小崎恭弘さんに、上手な「褒め方」「叱り方」について、詳しくお聞きしました。

日本人の多くの親は、諸外国に比べると子どもを褒めるのがとてもヘタクソなんです。減点主義から加点主義に発想を切り替え、子どもを見るようにしていただきたいですね。そうすれば、おのずから褒めるべきポイントが見えてきます。「できるようになったこと」を見つけるたびに褒めていけば、子どもはすくすく伸びていきます。「できなかったこと」を探して叱るより、その方が親も子もずっと幸せになれると思います。

日本人の親は褒め方がヘタクソだと言いましたが、実は、叱り方もヘタクソなんです。私は、3つの要件を満たしていないと叱ってはいけなく考えています。それは、次の3つです。

- (1) 親子の良好な関係性が保たれている
- (2) 叱る言葉にメッセージが込められている
- (3) ゴールが設定できている



例えば、何の信頼関係もない、隣の部署の部長から叱られたとなれば、誰だって「なんでお前に叱られんといけないの！」ってなりますよね？つまり、人を叱るときというのは、叱る側と叱られる側に良好な関係性が保たれていなければ、無意味どころか逆効果になりかねません。

親が子どもを叱るときも同じです。特にパパにありがちなのですが、ママほど子どもとの信頼関係がないのに、ママに頼まれて叱ってみたところ、「パパ大嫌い！あっち行って！」と言われ、逆効果になってしまうというのはよくあるパターンです。叱るには、まずは大前提として子どもとの信頼関係を普段から築いておかなければならないことを忘れないようにしましょう。

ゴールを設定した以上は、子どもがそれを達成したら、それ以上叱ってはいけません。叱られた子どもが反省して行動したら、それ以上、何かネチネチと言ってはいけません。

もう一つ、お伝えしたいのは、「叱る」と「怒る」は違うということです。先ほどお伝えした3つの要件が満たされていれば、「叱る」という行為が成立しますが、単に子どもに気に入くないことがあり、何のメッセージも込めず、ゴールも設定せずに、ただ感情を爆発させるのは「怒る」という行為でしかありません。親が自分の怒りや悲しみを発散しているにすぎないのです。



もっとカンタンに言えば、「子どものためにする」のが叱るという行為で、「自分のためにする」のが怒るという行為であると思います。

親のコミュニケーション能力は、ものすごく子どもに影響を与えています。親の皆さんは、ぜひそのことを意識して、丁寧に子どもと関わっていただきたいと思います。

＜大阪教育大学准教授 小崎 恭弘＞